

新潟の町家における空間構成の特徴とそのしくみ

—高田・白根・栃尾の「ヒアワイ」「ダシアイ」「クイアワセ」 の使われ方と共用のしくみ—

Space Feature and Functions of "hiawai", "dashiai", "kuiawase" on "machiya" in Niigata

西村伸也*, 廣江真治**, 千々石佳弘**
*Shin-ya NISHIMURA, Shinji HIROE and
Yoshihiro CHICHIISHI*

The purpose of this study is to clarify the distinctive feature of "machiya" in Niigata, especially focused on the common-use space such as "hiawai", "dashiai" or "kuiawase" in Takada, Shirone and Tochio.

The results of this study are as follows;

- (1) "Zashiki" in Takada, which has the family altar between the room and "do-ma", is used for Buddhist mass and formal reception. But "chano-ma" in Shirone with the family altar opposite side of "do-ma" is used for that.
- (2) The limited space between two houses are equipped for "tokono-ma", family altar, stairs, closet and so on. This is called as "hiawai" at Takada, "dashiai" at Shirone and "kuiawase" at Tochio in Niigata.
- (3) In Shirone "tokono-ma" and family altar are equipped as "dashiai" at "chano-ma". But "hiawai" in Takada does not have so bigger depth to have these as "dashiai". For that, "zashiki" is furnished with the family altar at the side of "do-ma".
- (4) "Chano-ma" is void both in Takada and Shirone. "Machiya" of Takada has not the ceiling but Shirone. There is the relation between these difference and the shape of roof (the gable of "machiya" is faced to the street in Takada but the side of eaves is so in Shirone).

Keywords : machiya, snowy district, common-use, space constitution, way of living, Niigata

町家, 積雪地域, 共用空間, 空間構成, 住まい方, 新潟

1. 研究の目的

本研究は積雪地域の町家を対象にして、その空間構成の特徴を解明しようとするものである。特に本論では、積雪地域・町家の「雁木通り」に代表される共用空間の一つである、住戸間の隙間を収納などに利用する「ヒアワイ¹⁾」・「ダシアイ」・「クイアワセ」に焦点をあて、その使われ方・空間的な特性を捉えようとしている。

既存の町家に関する文献は、京都の町家に関するものが多い。「京の町家」(島村昇、鈴鹿幸雄他)¹⁾は、京都の町家のしくみ、室構成、住まい方を詳細に説明している。また、「町家共同研究」(上田篤、土屋敦夫)²⁾は、京都の町家の歴史とその抱える問題を考察している。また、上越市高田の町家についても、多雪という条件によって雁木が設けられていること、多くの収納空間を持つことなどを特徴として挙げている。これらは、個々の町家の空間構成やその特徴を捉えているものである。

これに対して、集住としての町家のしくみや共用空間

に焦点をあてた研究がある。「雁木と雪処理システム—上越市高田の場合—多雪地域の都市集住様式と住宅地の整備手法に関する研究 その1」(野口孝博、足達富士夫)³⁾では、高田の町家を対象にして多雪地域の戸建住宅の集住様式のあり方を解明しようとしている。特に、雁木の共用空間としての機能に着目している。また、「雁木通りの空間構成と住民評価に関する研究」(青木志郎他、1988)⁴⁾は、雁木の共用通路としての機能・母屋との連続性・管理等に対する住民の評価を分析し、雁木の部分的な消滅、床面の安全性等の問題を指摘している。「越後出雲崎に関する調査研究」(八木沢壯一他、1986)⁵⁾では、新潟県出雲崎町の町家と雁木、街並の歴史的な成立過程を調査し、雁木の私宅への囲い込みの進行が地租改正に起因すると推測している。これらは、共用空間としての雁木のしくみについて論じている。

さらに、「ヒアワイ」・「ダシアイ」・「クイアワセ」等、町家の隙間空間に関しては、以下の研究がある。

* 新潟大学工学部建設学科 助教授・工博

** 新潟大学工学部建設学科 大学院生

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering,
Univ. of Niigata, Dr. Eng.

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering,
Univ. of Niigata

「出雲崎の町割について」(八木沢壮一他、1986)⁶⁾では、新潟県出雲崎の町家において住戸間の江溝を埋め立てて共用空間として利用しており、町家の上手側と下手側でその使われ方が違っていることが指摘されている。また、「多雪地域における都市型高密度居住に関する研究」(足達富士夫他、1990)⁷⁾では、高田の町家に「部屋合い」という隙間の空間の共用があること、収納空間として敷地境界を越えて利用されていることが報告されている。

これらに対して、本研究は積雪地域である新潟県の高田、白根、栃尾3市の町家を対象にして、「ヒアワイ」・「ダシアイ」・「クイアワセ」の使われ方・空間の相違と町家内部の空間構成との関係を捉えることを目的としている。

2. 調査

2.1 調査方法

調査として、新潟県上越市高田・白根市・栃尾市にある町家の平面・立面の実測と住まい方のヒアリングを行った。ヒアリングの項目は、家族構成・家族の属性・建築年と改修年・改修の内容・部屋の呼称・各室の住まい方・暖房方法・屋根雪処理・庭の使い方などについてである。さらに、調査対象とした地域で町家の補修を請負っている大工に、室構成・室名・町家の地域での特徴に関するヒアリングを重ねて行った。

2.2 調査対象と調査時期

調査は、新潟県上越市高田で11軒、白根市で11軒、栃尾市で10軒の町家、合計32軒を対象とした(表1)。調査対象とした地域は、それぞれの町家が専用店舗化されず住戸内で生活が行われており、比較的古い明治から昭和初期の町家が多く残っている地域を選んだ。栃尾の

調査は1992年7月～1993年1月に、白根の調査は1993年6月～11月に、高田の調査は1993年6月～1994年8月に行った。

表1 調査対象

	実測調査軒数	調査時期
高田	東本町(6軒)、仲町(3軒)、大町(2軒)	'93年6月～'94年8月
白根	一之町(4軒)、五六之町(3軒)、魚町(4軒)	'93年6月～11月
栃尾	大町(5軒)、旭町(5軒)	'92年7月～'93年1月

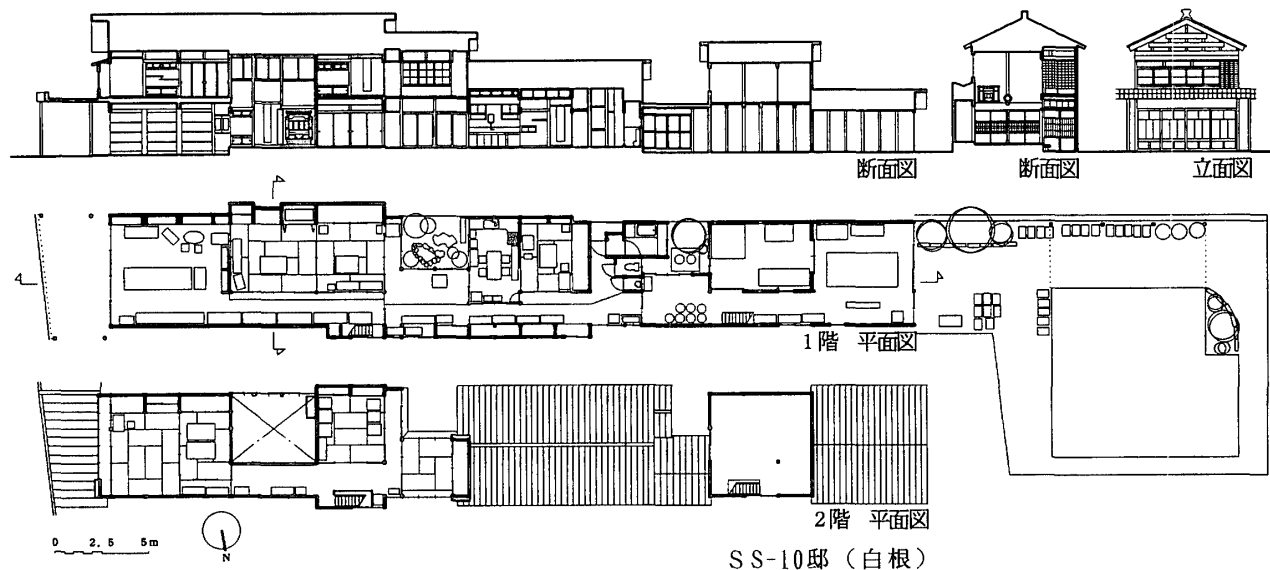
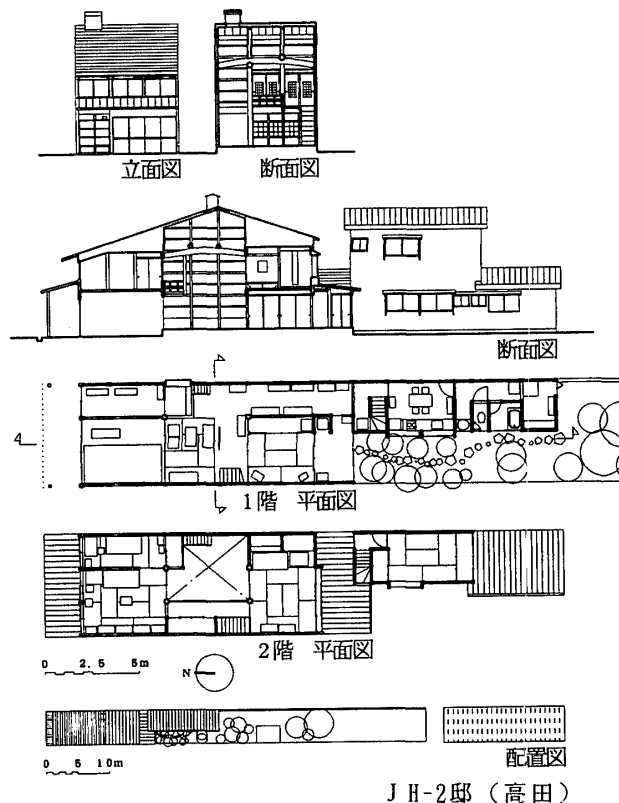


図1 高田の町家と白根の町家

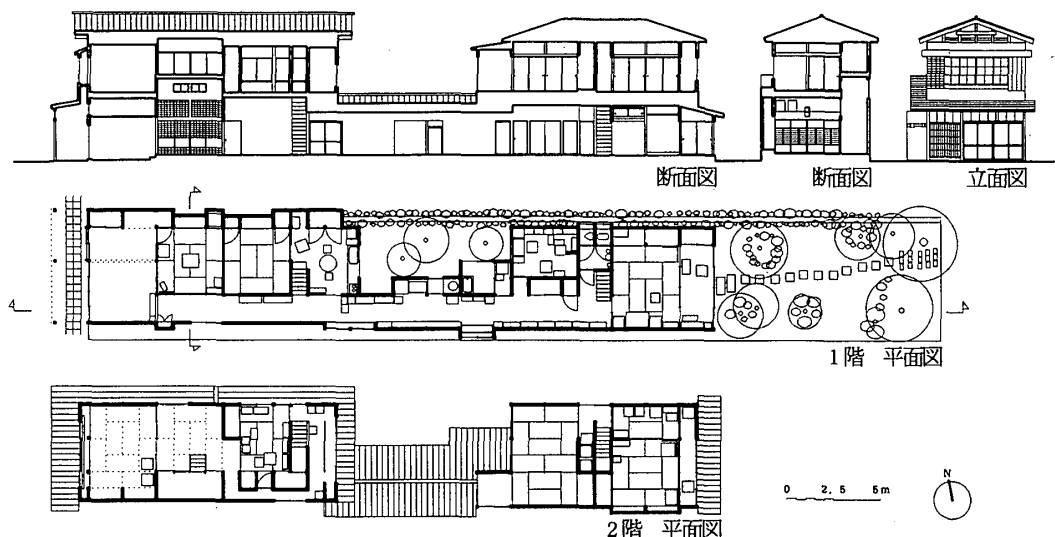


図2 栃尾の町家 (T0-4邸)

高田と栃尾は、過去10年の最大積雪深(平均)が162cm、154cmと新潟県内でも有数の豪雪地域であり、これに対して白根は53cmと比較的積雪量が少ない。高田は城下町で、町人住区は職業別に居住する区画が分かれており、調査対象の東本町は材木屋や運搬業、仲町は大工や鍛冶屋、大町は木工職人や塗師が多い地区であった⁸⁾。白根は中之口川から信濃川にいたる作物の集積地として、川の右岸に沿って形成された商業の拠点であった⁹⁾。中之口川に並行する旧道に沿って町家が並び、現在でも川の流れてから川上が街の上手と呼ばれている。栃尾の町家は刈谷田川に沿った旧街道沿いに並んでおり、調査対象とした大町は栃尾の町並では最も古く明治時代の町家が点在する地区で、旭町は大正後期の大きな水害以後に再建された町家が並んでいる¹⁰⁾。

3. 町家の室構成と住まい方

3.1 調査結果の概要

調査対象の町家の概要を表2に示す。図1のJH-2邸は明治35年に建設された高田の町家で、現在土間に床を張り、住戸後方は昭和38年に建替えられている。SS-10邸は昭和7年に建設された白根の酒屋である。住戸の後方は新潟地震後に改築され、倉庫と車庫を設けて土間でつないでいる。高田の町家の多くは、敷地後方に広い空き地をもっており、白根・栃尾に比べて建ぺい率が小さくなっている。これに対して白根の町家は、敷地後

方への増築部分が大きく、建ぺい率、容積率ともに高田・栃尾に比べて大きな値となっている。なお、調査対象とした白根の町家には住宅規模の大きい旧地主層の住戸が含まれており、これを除いた平均では敷地面積は323.5㎡、建物間口は5.0m、建築面積は195.2㎡、延べ床面積は345.7㎡となる。

図2のT0-4邸は大正10年に建設された栃尾の町家で、茶の間脇の廊下の天井高を高く取り高窓から採光しており、中庭から後方は昭和30年に増築されている。また、調査対象の高田の町家は専用住宅が、白根の町家は店舗併用住宅が多く、栃尾の町家は専用住宅と店舗併用住宅がほぼ同数であった。

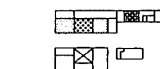


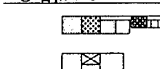
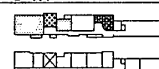
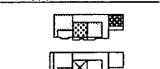
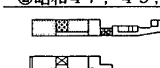
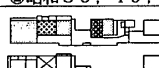
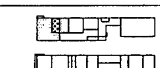
3.2 町家の室構成

図3は、調査対象とした町家(高田・白根・栃尾)の現在の室構成を、模式的に示したものである。「ミセ」・「茶の間」・「ザシキ」または「寝間」の順で部屋が1列にならび、それに沿って土間¹²⁾が配置されている。白根の町家は、ミセの奥行きが深く、その後ろには「帳の間」と呼ばれる板の間がある。さらに、住戸の後方に台所と寝間を設けている。高田、栃尾の町家では、土間の後方に台所が設けられ、高田では、ザシキ後方の「トオリ」とよばれる土間を改築して食事の部屋にしている場合が多い。二階は共通して、茶の間の吹き抜けを挟んで道路側を「表二階」、裏庭側を「裏二階」と呼び分けられている。

いずれの町家も様々な増改築や建替えが行われている

表2 調査結果の概要(平均)

	敷地間口 (m)	敷地奥行 (m)	敷地面積 (㎡)	建物間口 (m)	建物奥行 (m)	建築面積 (㎡)	延床面積 (㎡)	建ぺい率 (%)	容積率 (%)
高田	5.2	58.5	308.4	5.0	27.6	115.4	197.0	43.2	74.7
白根	7.5	49.9	381.0	6.7	34.1	241.3	374.8	66.4	105.1
栃尾	7.1	31.8	220.8	5.8	25.3	118.5	210.6	56.1	99.5

高田	白根	栃尾
 JH-2邸 ①明治35 ②昭和38	 SI-1邸 ①明治中期 ②昭和38	 TO-4邸 ①大正10 ②昭和30
 JH-4邸 ①明治以前 ②昭和47, 49, 55	 SS-8邸 ①昭和6 ②昭和39, 49, 60	 TO-5邸 ①大正初期
 JH-5邸 ①昭和52	 SS-10邸 ①昭和7 ②昭和39	 TA-8邸 ①昭和6 ②昭和58

□ミセ □帳の間 ◻茶の間 □寝間・ザシキ ◻台所
 ①建築年代 ②建て替え・増改築

図3 高田・白根・栃尾の室構成例

が、このような部屋の並び方・構成の基本的な特徴は維持されていると思われる。

3.3 町家の住まい方

表3は高田、白根、栃尾の町家の現在の住まい方を、部屋別に整理したものである。茶の間は接客、団らん、食事の場で、家族の生活の中心になっている。食事は増改築によって住戸後方に設けられた部屋でとられていることが多い。高田のザシキと白根・栃尾の寝間は主人夫婦の寝室に使われているが、特に高田のザシキは、法事などの儀礼の間としての機能を持ち、土間側に仏壇が置かれている。一方、白根・栃尾の町家では、茶の間に仏壇が置かれ儀礼の間となっている。

表二階と裏二階は、子どもや若夫婦の寝室と客間として使われている。高田の町家では裏二階、白根・栃尾の町家では表二階が、客間になっており、これらはその家で最も高い格付けを持つ部屋として、床の間がしつらえられている。他方、高田の表二階、白根・栃尾の裏二階は、子どもや若夫婦の寝室として使われている。このように、高田の町家と白根・栃尾の町家では、表二階と裏二階の使われ方が逆になっているが、これは明治以前の高田で表二階を居室にできず²³⁾、客間を裏二階に設けたことによると考えられている。

このような儀礼の間の位置の違いや表二階・裏二階の使われ方の違いは、町家の空間構成の違いと深く関わっているように思われる。

4. 町家の空間構成

4.1 「茶の間」「ザシキ・寝間」「土間」の構成

図4は高田と白根の町家について、茶の間とザシキ、茶の間と寝間の空間構成を示している。高田と白根・栃尾の茶の間は、ともに家族が集まる場所として生活の中心となっているが、その空間の質や格付けが多少違って

表3 住まい方

	ミセ		茶の間		ザシキ・寝間		台所		表二階		裏二階	
	高田	白根・栃尾	高田	白根・栃尾	高田	白根・栃尾	高田	白根・栃尾	高田	白根・栃尾	高田	白根・栃尾
接客・食事・儀礼・就客	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
売客・ん事・礼・寝間	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

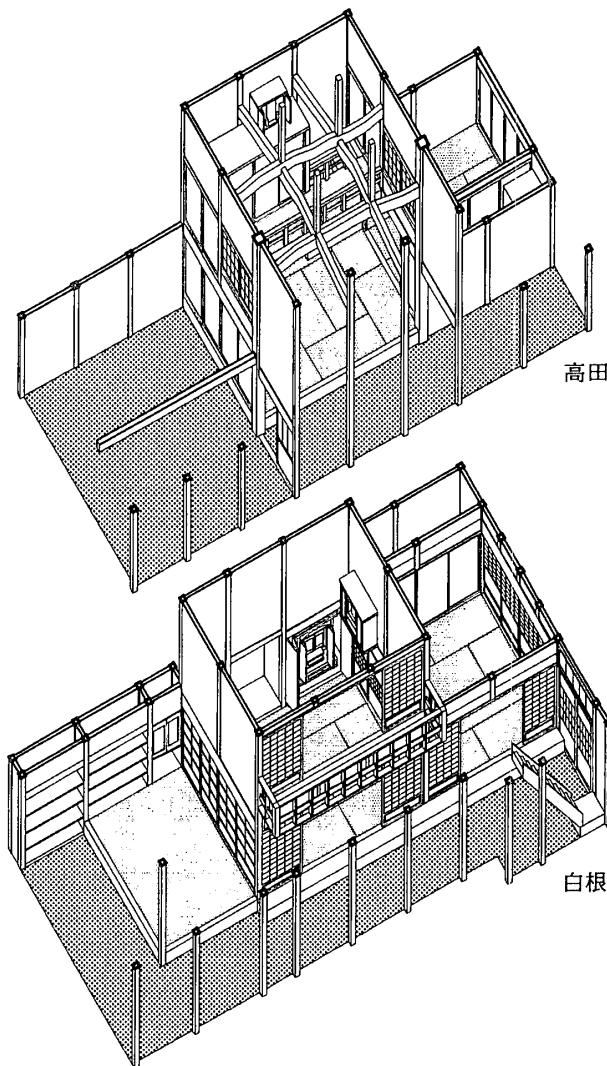


図4 茶の間とザシキ・寝間、土間のつながり

いると思われる。高田の茶の間は、土間との間に障子やふすまなどの仕切がなく、住戸内への上がり口である。土間はミセと茶の間の間で仕切られていて、白根・栃尾のような外部からつづいた空間とはなっていない。また、土間と茶の間の上部は吹き抜けていて、小屋組が露出している。ここに二階への階段が設けられ、表二階と裏二階をつなぐ渡り廊下が、茶の間の上を跨いでいる。これに対して、白根・栃尾の茶の間は、土間との間に障子で仕切られ、独立した部屋としてしつらえられている。表二階と裏二階をつなぐ廊下は、茶の間をさけて土間の二階部分に設けられ、茶の間の吹き抜けと二階の廊下との

間も障子で仕切られている。

また高田の町家では、茶の間と土間が一体の空間になっていることとは対照に、ザシキと土間との間に押入や仏壇を納めていて、茶の間を通してザシキに入っている⁴⁴⁾。一方、白根・栃尾の町家では、寝間と土間の間が障子などで仕切られてはいるが、土間から直接出入りすることが可能で、高田の町家のように明確に区分されていない。さらに茶の間にある仏壇と床の間、寝間の押入などは、土間とは反対側の隣戸との境界部分に造り込まれている。

このように儀礼の間は他の空間から切り離され、格式の整った部屋としてしつらえられている。高田では儀礼がザシキで、白根・栃尾では茶の間で行われており、高田と白根・栃尾の空間構成の違いとして現れていると思われる。

4.2 天窓と高窓

高田の町家の屋根は平入り、白根・栃尾の町家では妻入りと、屋根の形状が異なっている(図5)。茶の間はともに吹き抜けており、上部に天窓や高窓が設けられている。これらの窓は、茶の間にあった囲炉裏の排煙と暗い茶の間への採光を確保するためのものである。平入り屋根の高田の町家では、家の側面が隣戸と接しているため屋根の上へ天窓を設けている。一方、妻入り屋根の白根・栃尾の町家では、隣戸との間に3尺程度の隙間を持っていて、この隙間を利用して高窓から排煙・採光をしている。

高田の町家では、吹き抜け上部の天窓から茶の間への採光を確保するために小屋組が露出している。この天井のない茶の間ではなく奥のザシキが儀礼の機能を持った部屋となっている。これに対して、白根・栃尾の町家では、土間または茶の間側の高窓から採光を確保し、吹き抜け上部には天井が張られ、茶の間が儀礼の間としてしつらえられている。

4.3 空間構成の違い

このように高田と白根・栃尾の町家における空間構成

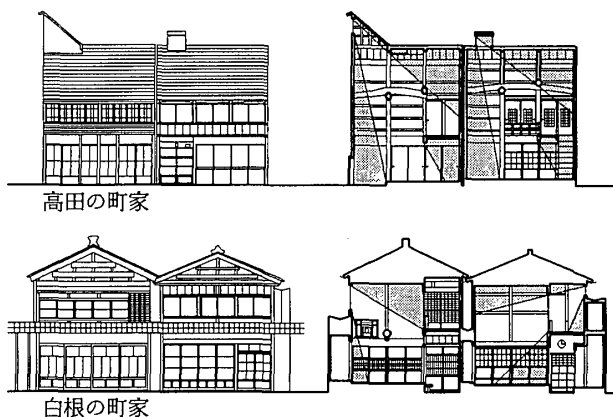


図5 屋根形状と採光の取り込み方

の違いのひとつは、茶の間、ザシキ・寝間、土間のつながりとその使われ方にあると思われる。茶の間に仏壇を置いて儀礼の間とした白根・栃尾に対し、高田では、茶の間に土間と連続し天井も張られていないために、奥のザシキが儀礼の間としてしつらえられている。屋根形状・採光方法の違いが、このような茶の間・ザシキの空間機能・使われ方を異なったものにした一因と考えられる。

5. 住戸間の隙間の利用 「ヒアワイ」・「ダシアイ」・「クイアワセ」

調査対象の町家では、住戸と住戸の間の隙間を収納や階段に利用している例が確認された。本章では、住戸間の隙間の使われ方に注目する。

高田の町家は敷地境界ぎりぎりに柱を建て、住戸と住戸の間には数cm程度の隙間ができる。平入りの屋根は隣戸の屋根と接していて、雨仕舞は屋根同士が接した部分で行われ、雨がこの隙間に落ちないように工夫されている。白根・栃尾の町家では、柱は敷地境界から約1尺5寸内側に建てられ、隣戸との隙間が3尺程度できている。屋根は妻入りで、軒先が互いに隙間の上に伸びているが雨仕舞はされていない。このように高田に比べ大きな隙間が住戸間にできている。

これらの住戸と住戸の間にできる隙間をそれぞれが利用することを、高田では「ヒアワイ」、白根では「ダシアイ」、栃尾では「クイアワセ」と呼んでいる。

5.1 ヒアワイ

図6のように、高田の町家では隣戸との間のわずかな隙間と、自邸の壁厚分を利用し「げた箱」、「飾り棚」などとして利用している⁴⁵⁾。これらは20cm程度の浅い奥行のものである。ヒアワイは町家が建てられると同時に設けられることもあるが、建てられた後に造り足されることが多い。雨仕舞や隣戸の壁にかかわるような工事

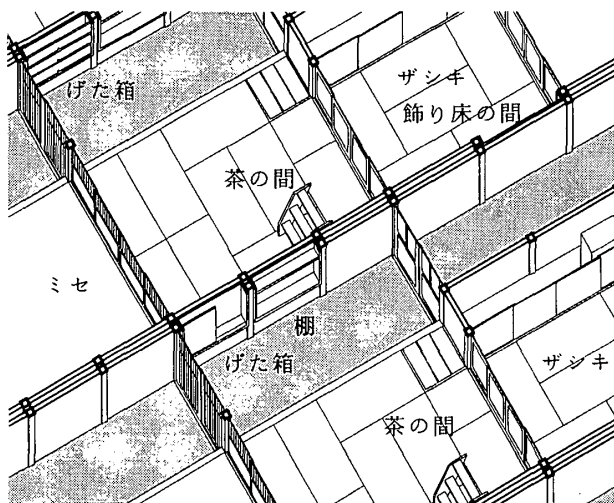


図6 高田のヒアワイ

表4 ヒアワイの位置と用途

	ヒアワイ有無		1階 上手側			1階 下手側 ニワ沿い				2階 上手側		2階 下手側	
	上手	下手	ミセ	茶の間	ザシキ	ミセ横	茶の間横	ガシ横	奥	表二階	裏二階	表二階	裏二階
JH-1邸	×	○	×	×	×	×	棚、げた箱	棚	×	×	×	×	×
JH-2邸	○	○	×	×	飾り床の間	×	げた箱	×	×	×	×	×	×
JN-7邸	×	○	×	×	×	×	×	収納	収納	×	×	×	×
JN-9邸	○	○	棚	棚	飾り床の間	棚	げた箱	×	×	×	×	×	×
JO-10邸	×	○	×	×	×	×	げた箱	棚	×	×	×	×	×

○：ヒアワイ有り ×：ヒアワイ無し

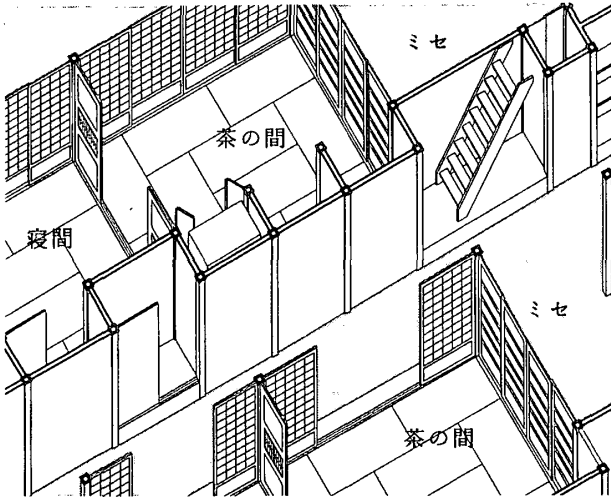


図7 白根のダシアイ

がないため、これを設ける時には、隣戸と相談せずに各住戸が独自に造り込んでいることが多い。しかし、住戸間の隙間が全てヒアワイとして使われてはならず、各住戸でそれぞれに必要な箇所にて設けている。

表4はヒアワイの位置と用途を示している。高田の町家では、地区の上手側に部屋が下手側に土間が配置されている。下手側のヒアワイは、げた箱や棚などの収納として、上手側のヒアワイは茶の間の棚や、ザシキの「飾り床の間」として使われている。しかし、上手側に設けられるヒアワイは少数で、土間のある下手側のヒアワイの多いことが特徴である。

5.2 ダシアイ・クイアワセ

白根の町家は、隣戸との間に約3尺の隙間をもっている。図7のように、この隙間を押し入、床の間、仏壇、階段などに隣戸同士が交互に利用している。図8は、ダシアイが設けられている4軒の町家の平面・断面図である。高田のヒアワイと異なり、白根のダシアイは、町家の建築と同時に設けられている点で違いが認められる。

表5は、白根で確認されたダシアイの位置と用途を示している。白根の町家は地区の上手側に部屋を、下手側に土間を設けるといのが特徴である。ダシアイは、町家の上手側・下手側両方に設けられているが、その用途が多少異なっている。上手側には、茶の間に床の間と仏壇、寝間に押し入のダシアイが設けられている。また、二階の上手側には、隣戸の高窓をふさぐことがないように、

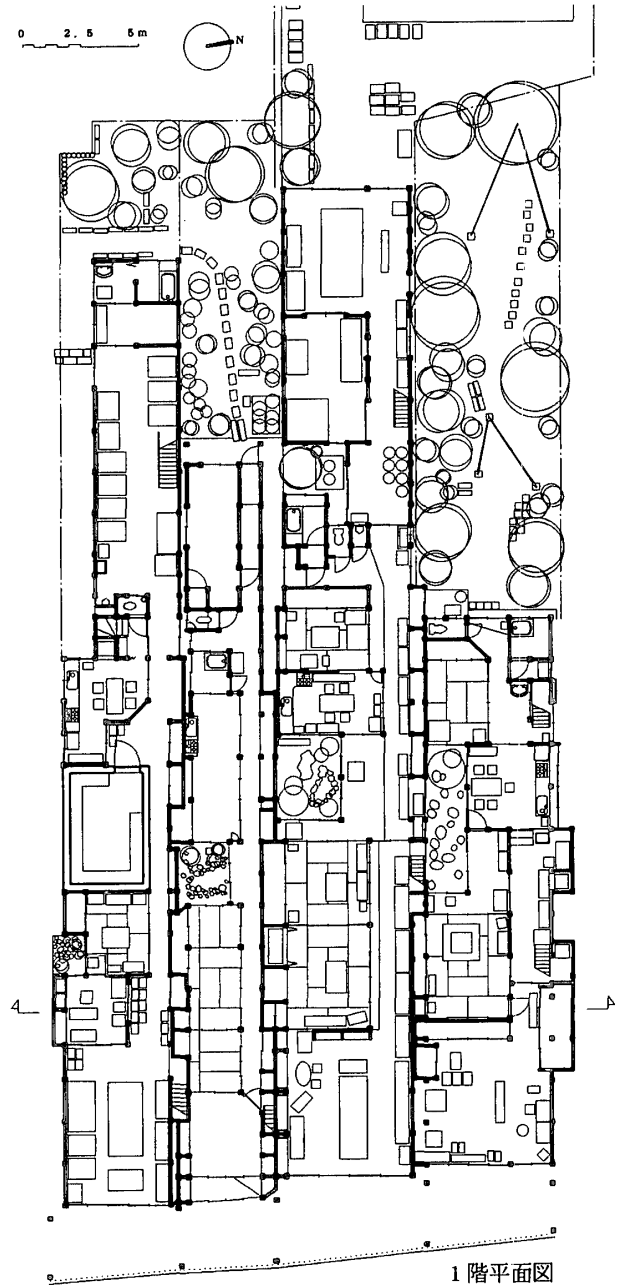


図8 ダシアイを持つ町家(SS- 8, 9, 10, 11邸)

表5 ダシアイの位置と用途

	ダシアイ有無		1階 上手側			1階 下手側 トオリノマ扱い				2階 上手側		2階 下手側	
	上手	下手	ミセ	茶の間	寝間	ミセ横	茶の間横	寝間横	奥	表二階	裏二階	表二階	裏二階
SI-1邸	○	○	×	床の間、仏壇	押入	棚、階段	収納	収納	×	×	×	収納、階段	×
SI-4邸	○	○	棚	×	×	棚	-	-	-	×	×	床の間	-
SG-6邸	○	×	棚	床の間、仏壇	×	×	×	×	×	×	×	×	×
SS-8邸	○	○	×	(床の間、仏壇)	×	階段	押入	×	収納	床の間	×	押入、階段	×
SS-9邸	○	○	棚	床の間、仏壇	押入	押入、階段	×	収納	収納	×	×	階段	-(裏二階無し)
SS-10邸	○	○	棚	床の間、仏壇	押入	×	×	階段	収納	×	押入、床の間	×	階段
SS-11邸	○	○	棚	床の間、仏壇	押入	×	収納	(階段)	収納	×	×	×	(階段)

○：ダシアイ有り ×：ダシアイ無し -：隣戸無し ()内：改築前

ダシアイは造られておらず、下手側は、自戸の高窓を避けて階段のダシアイが設けられている。このように、各住戸のダシアイの位置と用途は、この町家内部の空間構成と深い関係があると思われる。

図9はダシアイの位置と用途を模式的に示したものである。上手側には床の間・仏壇・押入が大半の町家で設けられている。また、下手側のダシアイである階段の位置は、上手側の仏壇・床の間・押入とそれぞれの部屋との関係ほど規則的ではない。むしろ、ダシアイを設ける際に、下手側の住戸の床の間・仏壇・押入が優先され、階段の位置はこれらを避けて造られたのではないかとと思われる。

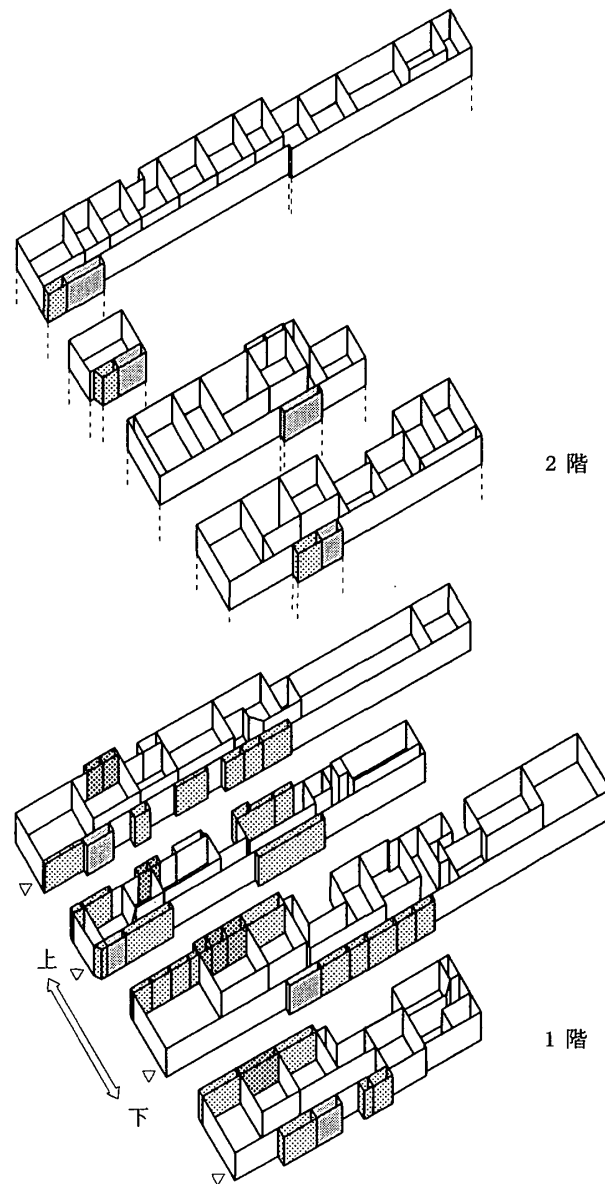
このダシアイの上部には、凹形の断面をもった「ダキ」と呼ばれる共同の屋根が架けられ、2軒の間の雨樋の役目をしている。このダキの補修費は、それを挟む2軒が折半で負担している。また、各住戸のダシアイの位置は、住戸を建替えても継承されており、敷地境界とは別にダシアイに沿って住戸の境界は複雑に入り組んでいる。

栃尾の町家でも3尺程度の住戸間の隙間を、白根と同じように、床の間や押入などとして利用している例が確認された。しかし、白根に比べて建替えの進んでいる栃尾では、クイアワセの現存例は少ない。

5.3 住戸間の隙間の利用と町家の空間構成

高田のヒアワイは、茶の間の飾り棚、ザシキの「飾り床の間」として、茶の間につづく土間では、げた箱と棚として利用されている。奥行きに必要な仏壇と押入は、ヒアワイではなく、ザシキと土間の間に造られていて、ザシキと土間とを仕切っている。このためにザシキは、土間から分離されてその空間の独立性が高められている。逆に、茶の間は土間との間に仕切がなく、住戸内への上がり口として、表二階・裏二階の渡り廊下が吹き抜けの部分に掛かっている。

これに対して、白根のダシアイは、茶の間で床の間・仏壇、寝間で押入として利用されている。茶の間には仏壇が置かれ、土間との間を障子で仕切ることによって、儀礼の間として使われている。さらに、二階の渡り廊下は茶の間の上部を避けて土間の上に造られており、茶の間の使われ方がこの点で、高田とは違っている。



■ 床の間・仏壇 ■ 押入・収納 ■ 階段

図9 ダシアイのしくみ

このように、白根ではダシアイとして床の間・仏壇が茶の間に造られたことが、茶の間を儀礼の間として使うことを支える一因になっているとも考えられる。逆に、高田ではヒアワイとして床の間・仏壇を茶の間に置かず、

ザシキと土間との間に造り込まれている。このためにザシキは茶の間よりも格式の高い閉鎖的な空間になっている。儀礼の機能が茶の間ではなくザシキにあることは、このようなヒアワイのあり方と関係づけて捉えられる。

さらに、ダシアイ・ヒアワイの使われ方・造られ方の違いは、それぞれの奥行きの大きさ・採光方法に依存していると考えられる。つまり、前章で言及したように住戸間の隙間の大きさ・採光方法は、平入りと妻入りの屋根形状の違いによって規定されており、屋根形状の違いもそれぞれの空間構成に影響を与えていると思われるからである。

6. 裏庭

栃尾の町家は、雁木とクイアワセのような空間の共用とともに、住戸後方の庭も隣戸と共用性の高い使われ方をしている。高田と栃尾とは積雪の多い地域で、冬季、町家の裏庭は屋根雪を貯めるためのスペースとなる。図10のように、高田の町家は深い敷地奥行に対して、住戸は表の道路側に寄せて建てられ、敷地奥行の半分以上の空き地が確保されている。屋根から下ろされた雪は、この奥行の深い裏庭に貯められる。一方、栃尾の町家は、敷地が山と川によって限定され高田に比べて奥行が浅く、住戸の後方に屋根雪を貯める十分なスペースはない。そのため、図11のように、隣合う2軒が互いに庭を向き合うように造って、そこを共同の雪捨場としている。これらの庭の敷地境界には、垣根や塀は設けられておらず、町家の表と庭の裏にある流雪溝に雪を流し、狭い雪捨場を補っている。積雪量の少ない白根の町家では、高田や栃尾のような庭の利用はなく、隣戸と向かい合う中庭があってもその間には高い板塀や垣根が設けられている。

7. まとめ

これまでの分析から、新潟の町家の特徴的な空間構成とそのしくみとして明らかになったことは、以下である。
①高田と白根・栃尾の町家では、部屋のならびは似ているが、その使われ方に違いが認められた。高田のザシキは、法事などの儀礼の間としての機能を持ち、土間側に仏壇が置かれている。一方、白根・栃尾の町家では、茶の間に仏壇が置かれ儀礼の場となっている。

②ヒアワイ、ダシアイ、クイアワセなど、住戸間の隙間を隣戸と共用し、住戸内に取り込んで利用している町家の例が確認された。ヒアワイとダシアイは、住戸間の隙間の大きさの違いにより、設け方や用途が異なっている。

③茶の間を儀礼の場として使う白根・栃尾の町家とザシキを儀礼の場として使う高田の町家にあっては、茶の間・ザシキのしつらえ・使われ方の違いが、ヒアワイ、ダ

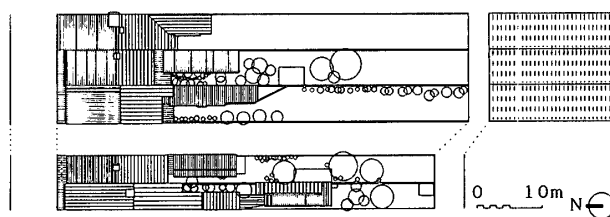


図10 高田（東本町）の裏庭

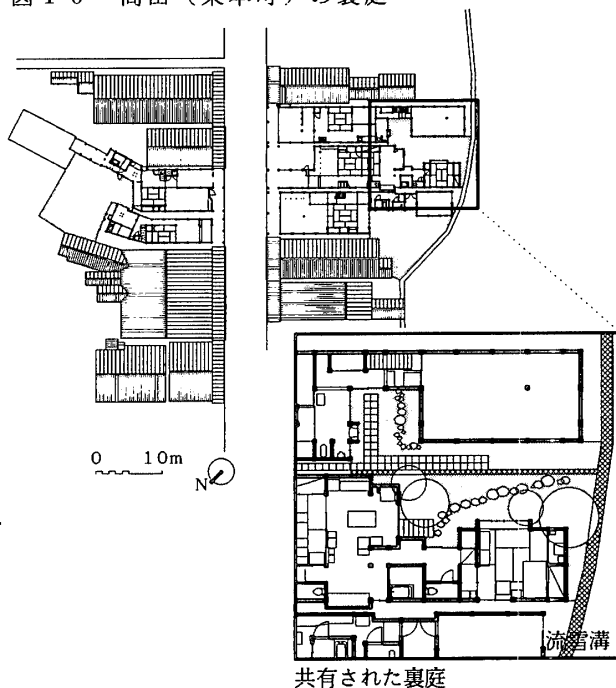


図11 栃尾（旭町）の裏庭

シアイ、クイアワセと関連づけて捉えられた。また、妻入りと平入りの屋根形状、天窓と高窓の採光方法の違いにもその関連が認められた。

④栃尾の町家では雁木やクイアワセだけでなく、住戸後方にある裏庭も屋根雪の貯雪場として、隣戸で共用されるという特徴をもつ。

積雪地域の町家では、近隣との協力や協調によって生活を成立させている。雁木や、住戸間の隙間の共用のしくみ（ヒアワイ、ダシアイ、クイアワセ）、裏庭の共用（栃尾）などは、その空間としての現れであると思われる。このような共用のしくみをもつ町家は、高田では戸別の建替更新によって、この町家の空間構成を維持してきている⁷⁾。これは間口いっぱい町家が建てられること、ヒアワイが隣戸側に大きく張り出していないこと、戸別に大きな裏庭を持つことなど、白根・栃尾の町家に比べて、そのしくみの隣戸に与える影響が小さいためであると考えられる。一方、白根・栃尾の町家は住戸間の隙間を一体で共用していること、栃尾の裏庭のように互いに大きく空間を共用することによって、そのしくみを成立させていることが特徴である。このことは、住戸の

建替えの自由度を制限しているが、逆に町家の集合性が維持されているとも考えられる。現実にも、高田の町家では比較的建替えが進んでいる一方、白根の町家の建替えの進行は遅く、住戸前方はそのまま敷地後方に増築している町家が多い。

本研究で着目した「ヒアワイ」・「ダシアイ」・「クイアワセ」は、町家の空間構成とも深く結びついた特徴あるしくみである。このような空間の共用のあり方は、今後の町家やその地区の住環境形成を計画するにあたって、考えられなければならない空間要素であるとともに、住戸相互のあるいは住戸と地域とをつなぐ重要な視点を与えてくれると思われる。今後、このような住戸間の隙間の共用というしくみが成立する過程についての調査・分析も必要であると考えている。

謝辞

調査を快くお引き受けいただいた上越市高田、白根市、栃尾市の住民の方々に深く感謝いたします。また、高田の調査で貴重なご助言を頂いた筑波啓一先生にお礼を申し上げます。本調査は新潟大学学生朝野剛、市川智子、樋口恭子、遠山奈穂美君の協力を得て行われたものです。

注

- 注1) 参考文献7)では、「部屋合い」として説明されている。
- 注2) 一般に「通り庭」として知られているが、調査から高田では「ニワ」、白根では「トオリノマ」、栃尾では「トオリ」と呼ばれていることが確認された。本論文の中では、便宜的にこれらを「土間」と表記している。
- 注3) 参考文献11)では、町家の二階から街道を通る大名を見おろさないように、表二階に窓を設けることを禁じられていたことが説明されている。
- 注4) 参考文献12)では、金沢の町家においても、「一般的に「通り庭」型の場合、この奥の部屋とトオリニワとの間は壁で仕切られ、トオリニワから独立した「ザシキ」が構成される。」と論じられている。
- 注5) ヒアリングより「ヒアワイ」を住戸間の隙間の意味としても、使われていることが確認された。また、参考文献13)では、「庇合い(ヒアイ)」として「新潟県上越地方の民家において、主屋の軒下を指す呼称。」と示されている。

参考文献

- 1) 島村昇、鈴鹿幸雄他：京の町家、鹿島出版会、1971年
- 2) 上田篤、土屋敦夫：町家共同研究、鹿島出版会、1975年
- 3) 野口孝弘、足達富士夫：雁木と雪処理システム—上越市高田地区の場合—多雪地域の都市集住様式と住宅地の整備手法に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文報告集 第451号、pp.93~pp.103、1993年9月
- 4) 青木志郎、糸長浩司：雁木通りの空間構成と住民評価に関する研究—積雪市街地の共用空間に関する研究、日本建築学会学術講演梗概集、pp.225~226、1988年
- 5) 八木沢壮一他12名：出雲崎の雁木と妻入街並について（越後出雲崎に関する調査研究 その1）、日本建築学会学術講演梗概集、pp.805~806、1986年
八木沢壮一他12名：出雲崎の町割について（越後出雲崎に関する調査研究 その2）、日本建築学会学術講演梗概集、pp.807~808、1986年
八木沢壮一他12名：出雲崎の町家について（越後出雲崎に関する調査研究 その3）、日本建築学会学術講演梗概集、pp.809~810、1986年
- 6) 前載 5)
- 7) 足達富士夫、野口孝博、白石真也：多雪地帯における都市型高密度居住に関する研究—上越市高田地区と札幌市の場合—（その1 雁木併設町家と集住のしくみ（高田））、日本建築学会学術講演梗概集、pp.37~38、1990年
- 8) 高田市史編集委員会：高田市史、高田市役所、1958年
- 9) 白根市：白根市史、白根市、1989年
- 10) 栃尾市史編集委員会：栃尾市史、栃尾市役所、1977年
- 11) 上越市教育委員会：越後高田の雁木、東京大学工学部建築史研究室編集、1982年
- 12) 玉置伸吾、近藤達男：歴史的既成市街地内居住地における住宅型と設備空間の関係—金沢市におけるケース・スタディー NO.3—、日本建築学会論文報告集 第336号、pp.100~111、1984年2月
- 13) 日本建築学会民家語彙収録部会編纂：日本民家語彙集解、日外アソシエーツ、1985年

(1994年3月8日原稿受理、1994年10月25日採用決定)